

北陸学院の学生の情報機器利用の現状と今後の情報基礎教育

Information Literacy Program and Reality of Students' Use of Information Systems

辰 島 裕 美*

要旨

変化の激しい情報系分野において、情報基礎教育の今後の在り方を検討する際、現状の学生を把握することが必要である。研究グループで調査した全国データの結果と本学学生を比較することによって、本学学生は入学の時点で自分専用のパーソナルコンピュータ（以下 PC）を所有せず、インターネットを利用する際に携帯電話を使う傾向が高いことがわかった。しかし、大学で PC に関して学びたいと希望する項目は基本操作が最も多く、次いで創作活動、専門教育に必要なスキルであった。この結果は順位と比率ともに全国と大差はなかった。これらをふまえ、今後の情報教育の展開として、枠組みを再検討し学科学部に適応したキャリア教育のテーマを取り入れることを提案する。

キーワード：情報基礎教育／ICT／キャリア教育／プレゼンテーション

I. はじめに

高等学校では 2003 年度より普通科で教科「情報」が必修科目となり、大学生は 2006 年度の入学生から高等学校で「情報」に関する教科をすでに学んでいることになる。そのため高等教育ではこれまでの情報教育の内容を見直す必要があるといわれていた。すなわち、基礎は高等学校で学んでいるので、リテラシー科目の必要性がなくなるか、あるいは高度な内容に変更するか、という方向の見解が多かった。しかし、現実には学生個人の情報機器やアプリケーションソフトを利用する能力差は拡大する傾向にある。近年、高等学校の情報教育では 1 年生の 4 月ですでに情報の学習や情報機器の操作に対して苦手意識をもっている生徒も目立っている。

そのような状況の中で、筆者が所属する研究グループである CEIC の調査¹と本学を比較しながら、今後の情報教育の方向性を提案する。

II. 情報機器利用の現状調査

1. 調査の目的と分析の方法

「学生の ICT 活用実態調査」の目的は、大学の新入生に対して情報通信機器の利用実態や意識などを調べることにより、情報教育のあり方や問題点を検討するものである。2010 年の新入学生を対象として、研究グループの所属する学会²の会員メーリングリストで協力を依頼し、全国 13 の大学で 2232 人（内本学 227 人）の回答結果を元に集計されたものである。調査の方法はアップタウン社のスターキーズを用い、Web 入力により実施された。本学でも 2010 年 4 月に同様に実施した。すべての学科学部において、情報機器演習の履修者に対し、授業初回のオリエンテーションの際に回答の協力を依頼した。

自由記述の項目を除いた質問について、本学と全国の間に関連があるかどうかを調べるために、独立性の検定を行った。この結果、5%水準および 1%水準で有意となった項目を次に示す。（表中の単位は%）

2. 単純集計と検定の結果

①通学形態（表 1）

* TATSUSHIMA, Yumi
北陸学院大学短期大学部 非常勤講師

通学形態では、「自宅から」と「自宅外から」のどちらかを選択させた。本学では自宅からの通学生が70.5%であり、全国の55.7%より多い。

表1：通学形態

	自宅から	自宅外から
本学	70.5	29.5
全国	55.7	44.3

カイ2乗 18.203 自由度 1 p値 <0.0001 本学 227 全国 2000

② PC 歴とインターネット歴 (表2・3)

入学時点までのPC操作経験年数と、携帯電話等からの利用を含むインターネット利用歴を算用数字で回答させている。この年数は、「3年以下」、「4～6年」「7～9年」「10年以上」に分けて集計を行った。

PC歴とインターネット歴の双方において、全国に比べて本学は「7～9年」が多い。またPC歴は、本学では「4～6年」と「7～9年」の利用歴も32.3%と多いが、全国では「3年以下」32.9%、「4～6年」30.3%、「7～9年」23.8%の順となっている。

本学では小学校高学年からPCやインターネットを利用していた学生が多いといえる。

表2：PC歴

	～3年	4～6年	7～9年	10年～
本学	24.8	32.3	32.3	10.6
全国	32.9	30.3	23.8	13.1

カイ2乗 11.391 自由度 3 p値 0.0098 本学 226 全国 1991

表3：インターネット歴

	～3年	4～6年	7～9年	10年～
本学	14.5	40.5	37.0	7.9
全国	21.5	45.1	23.9	9.5

カイ2乗 20.092 自由度 3 p値 0.0002 本学 227 全国 1991

③自己所有PC (表4)

現在学生が自分専用のPCを持っているかどうかを問う設問である。複数回答の項目であり、重複もあるため、これらの複数回答項目では総回答数で率を分析した。それゆえ回答総数は回答者数を上回っている。

「ノート」、「ミニノート」「所有せず」について有意となった。本学は全国と比較して、ノートPCを持っている学生は34.7%と少なく、また自分専用のPCを所有していない学生は46.9%と多い。

表4：所有PC (複数回答可)

	デスク トップ	ノート	ミニ ノート	タブレット	所有せず
本学	17.6	34.7	0.8	0.0	46.9
全国	13.3	64.8	3.6	0.1	18.3
カイ2乗		35.923	6.843		67.193
p値		<0.0001	0.009		<0.0001

自由度 1 本学 245 全国 2136

④ PC の利用場所と利用時間 / 日 (表5・6)

学生はどこでPCを利用しているのか、また1日に平均してどのくらいの時間PCを使っているのかを問うものである。表5のPCの利用場所では「自室・自宅内」、利用時間では「利用せず」が65.9%と全国より少ない。表6の利用時間において、本学はPCを「利用せず」が43.6%と全国の13.0%より多い。全国は「1時間以下」が46.3%と一番多い。

表5：PCの利用場所

	どこでも	学校内	自宅・自 室内	その他	利用せず
本学	0.0	16.8	65.9	1.3	15.9
全国	0.7	15.3	76.3	0.7	7.1

カイ2乗 26.210 自由度 4 p値 <0.0001 本学 226 全国 1986

表6：PCの利用時間 / 日

	～1時間	1～3時間	3～5時間	5時間～	利用せず
本学	31.3	19.4	4.9	0.9	43.6
全国	46.3	31.3	6.9	2.5	13.0

カイ2乗 141.631 自由度 4 p値 <0.0001 本学 227 全国 1997

⑤ PC の利用目的 (表7)

PCの利用目的の設問も複数回答項目である。「レポート」は11.6%、「学習」21.6%、「調査」7.7%、「プレゼン」0.5%、「アルバイト」1.3%と全国に比べ、本学はこれらの目的がいずれも少ない。

表7：PC利用目的（複数回答可）

	学習	調査	レポート	コミュニケーション
本学	21.6	7.7	11.6	9.2
全国	22.3	9.4	19.3	7.9
カイ2乗	8.703	7.674	34.601	
p値	0.003	0.006	<0.0001	
	プレゼン	アルバイト	娯楽	その他
本学	0.5	1.3	37.5	10.6
全国	1.9	2.4	30.9	6.0
カイ2乗	8.331	5.193		
p値	0.004	0.023		

自由度1 本学379 全国4489

⑥購入を希望するPC（表8）

学生が今後購入を希望するPCの種類を問う質問では、「ノート」が45.4%と全国より多い。表4の自己所有PCの結果と合わせると、本学は、自分専用のノートを所有していない。しかし、ノートの購入を希望している学生は多い。

表8：購入希望PC

	デスクトップ	ノート	ミニノート	タブレット	わからない	購入しない
本学	11.0	45.4	15.9	2.2	18.9	6.6
全国	21.2	30.9	10.7	5.6	15.7	16.0

カイ2乗46.200 自由度5 p値<0.0001 本学227 全国1999

⑦購入希望の情報機器（表9）

学生が今後購入を希望するPC以外の情報機器を問う設問も複数回答項目である。全国と比べると「携帯電話」4.4%について本学が少なく、またほしいものが38.8%で「なし」とする本学が多い。

表9：購入希望情報機器（複数回答可）

	携帯電話	スマートフォン	書籍リーダー	電子辞書
本学	4.4	14.5	5.8	9.4
全国	13.1	17.3	6.45	10.8
カイ2乗	24.428			
p値	<0.0001			
	音楽プレイヤー	ICレコーダ	その他	なし
本学	33.4	4.0	4.4	38.8
全国	31.1	5.3	2.9	30.3
カイ2乗				4.418
p値				0.036

自由度1 本学276 全国2665

⑧携帯電話とインターネットの利用時間（表10・11）

表10は1日平均何時間くらい携帯電話やスマートフォン使い、また表11はPCと携帯電話などを含めてどのくらいインターネットを利用しているのかを問うたものである。双方の利用時間において本学も全国も、「1～3時間」の利用がもっとも多いことが共通している。しかし、全国と比べた際に、本学では「3～5時間」利用する学生が、携帯電話利用で30.7%、インターネット利用で19.6%と多く、携帯電話とインターネットの利用時間は長いといえる。

表10：携帯電話の利用時間/日

	～1時間	1～3時間	3～5時間	5時間～	利用せず
本学	14.6	36.8	30.7	14.6	3.3
全国	24.7	40.1	16.7	14.4	4.1

カイ2乗29.592 自由度4 p値<0.0001 本学212 全国1871

表11：インターネット利用時間/日（PC・携帯）

	～1時間	1～3時間	3～5時間	5時間～	利用せず
本学	29.9	38.8	19.6	6.25	5.4
全国	28.6	44.3	14.1	9.7	3.3

カイ2乗10.802 自由度4 p値0.028 本学224 全国1992

⑨インターネット利用の際の使用機器（表12）

インターネットをPCと携帯電話のどちらを主に使用するかの設問である。本学ではインターネットを主にPCで利用するものは20.8%であり、75.2%は携帯電話等でインターネットを利用している。全国の54.2%と比較して、本学は携帯電話等の利用が多いことが確認できた。

表12：インターネットの利用機器

	PC	携帯電話等	わからない	利用しない
本学	20.8	75.2	2.2	1.8
全国	42.2	54.2	2.4	1.3

カイ2乗39.456 自由度3 p値<0.0001 本学226 全国1995

⑩自信を持ってできること（表13・14）

下の表14の(1)～(8)の各質問項目に関し、自分ひとりで自信を持ってできるかを「全くできない」「少しできる」「大体できる」「自信を持つ

てできる」の4件法で回答する設問である。このうち、(4)、(7)、(8)において有意差が認められた。

(4)「PCでも携帯電話でも指定されたファイルをメールに添付して送信することができる」の「自信を持ってできる」は14.1%と少なく、(7)「PCにコンピュータウイルス対策を適切に行うことができる」の「全くできない」が71.2%と多く、また、(8)「インターネット上の人間関係のトラブルに適切に対処できる」でも「全くできない」が38.2%と多い。

表13:「できる・できない」有意項目

	(4)メールに添付 自信を持って できる	(7)PCにウイル ス対策 全くできない	(8)人間関係の トラブル対処 全くできない
本学	14.1	71.2	38.2
全国	22.1	43.4	29.4
p値	0.015	<0.0001	0.039

(4) カイ2乗 10.377 自由度3 本学 227 全国 2000
 (7) カイ2乗 66.680 自由度3 本学 226 全国 1994
 (8) カイ2乗 8.357 自由度3 本学 225 全国 1998

表14:質問項目

- (1) 表計算ソフトで、数式や簡単な関数を含む集計表作成やグラフ作成することができる
- (2) スライドをプレゼンテーションソフトで作成し発表することができる
- (3) ワードプロソフトを使って画像や表を含んだ文書を指定されたレイアウトで作成することができる
- (4) PCでも携帯電話でも指定されたファイルをメールに添付して送信することができる
- (5) 自分あるいは他人の個人情報を適切に取り扱うことができる
- (6) 他人の著作物を著作権者の権利を侵害しないで適切に利用することができる
- (7) PCにコンピュータウイルス対策を適切に行うことができる
- (8) インターネット上の人間関係のトラブルに適切に対処できる

また、本学のひとりで自信を持ってできる、できないについてグラフに表したものが図1である。ここからは、「自信を持ってできる」ものが

少ないことがわかる。「大体できる」と合わせても、半数を超える項目は、(4)「メールにファイルを添付」、(5)「個人情報を適切に扱える」、(6)「著作物を適切に利用できる」の3項目である。(7)「ウイルス対策」は「自信を持ってできる」と「大体できる」を合わせても8.0%であり、また(1)「表計算ソフトで数式や簡単な関数を含む集計表作成やグラフ作成することができる」も同様に11.5%である。

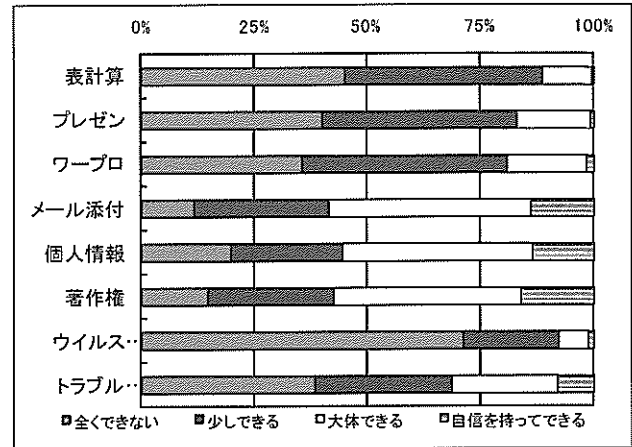


図1: 本学の「できる・できない」

Ⅲ. 考察

1. 本学はPCを持っていない

PCとインターネットの利用の履歴において、本学は小学校高学年のころから利用しているものが多い(表2・3)。また、7年以上という範囲、つまり小学校の段階ですでに利用していたとすると、インターネットの利用では本学は44.9%に達する(表2)。本学は、インターネットの履歴もPCの履歴も期間が長い(表3)。

自分専用のPCについてその形態を問うた設問は複数回答である。総回答数ではなく、回答者数でみると、回答者227人のうち過半数の115人が自分専用のPCを「所有せず」と解答している。同様に、全国においてPCの非所有率は2,005人中391人で19.5%である。

本学がPCを自己所有していないことの理由として2つの可能性がある。それは自宅で家族などと共有していることと、使わないから持つ必要がない、ということである。次にその根拠について述べる。

本学は表1より、自宅からの通学生が多いこと

から、家族と共用で利用していることが考えられる。

ところが、PCの利用時間を問う設問(表6)では、「1時間以下」どころか、本学の99人が「利用せず」と回答している。つまり、本学は全国と比較して、小学校から使用しているが、自己所有しておらず、PCを使っていないといえる。自己所有していないから使わない、使えないともいえる。しかし、利用場所を問う設問(表5)では、本学は「学校内」で利用する率が全国より若干上回っているものの、やはりこちらも「利用せず」が全国を大幅に上回っている。つまり、どこでもPCを使う率が高いとはいえない。これらのことから、自己所有していないから使わないというよりも、使わないから自己所有していない可能性が高いと考えられる。

PCの所有に関する留意点として、全国の分析では、女子学生はPCの所有率が低いという結果があり、この点も関連する可能性もある。それは、「自分専用のPCを所有する」「所有しない」と「性別(男子学生・女子学生)」のクロス集計では1%水準で有意差が認められたことによる。

このアンケートにおける本学の性別は男子学生11.9%、女子学生88.1%であり、PC非所有の要因が本学の特徴か、あるいは女子学生が多いことによるのかは特定することはできない。

また、PCを所有していないことの影響として、表13において全国と有意差が出た、ウイルス対策ができないことの関係も懸念される。なぜなら、高校の教科情報ではウイルス対策も学ぶが、実際にソフトウェアをインストールすることは、学校で実習することが困難であり、その点自己所有していれば、経験できる可能性が高いので、経験の差が出やすいためである。

2. 携帯電話とインターネットは同じ傾向

PCの所有と利用に差があったが、学生は他にどのような情報機器を所有し利用しているのだろうか。PC以外の情報機器の所有を調べた項目では、有意差が見られず、本学と全国とは大差がない。「携帯電話」「電子辞書」「音楽プレイヤー」の順で多くの学生が所有している。特に本学の電子辞書の所有率は78.4%と高い。

本学の購入希望PC(表8)の「購入しない」

項目と購入希望情報機器(表9)の「なし」項目に注目すると、PC以外の情報機器で購入希望が「なし」は38.8%に達しており、4割近い学生は他の情報機器には満足していると考えられる。それに対して、購入希望のPCで「購入しない」は6.6%で15人にとどまっている。ノートPCをはじめデスクトップやいずれかの形態のPCを購入したいと考えている学生は169人で、74.4%にのぼる。よって、本学のPCの購入願望は高いといえる。

本学のPCを所有する率が低い(表4)ことと、インターネットは携帯電話を利用する率が高い(表12)こと、さらに携帯電話の利用時間が長い傾向(表10)は関係があるものと推測できる。しかし、携帯電話の利用目的や普段からよく使うインターネットのサービスを調べた項目では、本学と全国では有意差が認められなかった。携帯電話の利用目的は、「コミュニケーション」「娯楽」が、本学も全国もそれぞれ7割前後であった。本学の普段からよく使うインターネットのサービスは「検索」78.4%、「メール」63.4%に続いて「動画共有」53.3%、「ブログ」39.6%、「ショッピング」31.3%、「SNS」20.3%などである。本学では、これらのサービスをPCではなく携帯電話で利用している傾向が高いことになる。

3. 大学でのPCの利用目的と学習

上記のとおり携帯電話は娯楽とコミュニケーションのツールであり、それに対してPCは学習と娯楽のツール(表7)である。改めてPCの利用目的の内容をみると、本学は、「コミュニケーション」と「娯楽」は全国より高い率であるが、有意差のあった「レポート・論文作成」「学習」「プレゼン」「調査研究」という、大学の学習でも利用度の高い項目について全国と比較して低い。

本学のPCを自己所有していないことの原因に「PCを使わないこと」が可能性としてあげられることを先に述べた。非所有率の高いことの要因としてPC利用の目的(表7)と合わせて考えると、本学は学習を目的とする率が低く、また娯楽は携帯電話で代用が利くとするならば、PCの所有率がさがることに関連するのではないだろうか。

しかし、「これから大学でPCに関して最も学

びたいこと」を問う設問は、全国と本学をクロス集計した際に有意ではない。表15の質問項目については、本学が67.0%、全国では63.7%で(1)の基本操作が第1位となった。以下は(3)が本学12.3%で全国14.0%、(2)が本学11.5%で全国13.4%、(4)が本学4.8%で全国5.4%と近い比率であった。つまり、本学はPCを所有しておらず、利用もしていないが、大学で基本操作を学びたいと希望する学生が7割近くおり、学びたいことの傾向は、全国の傾向と同様であるといえる。

全国データの分析では、「学習にPCを利用している」「利用せず」と「国公立大学」「私立大学」のクロス集計の結果でも1%水準の有意差で国公立大学の学生がPCを学習に利用していることが認められている。また、PCの利用場所に関して、「学校内」と「国公立大学」「私立大学」のクロス集計の結果でも1%水準の有意差で私立大学の学生が学校内でPCを学習に利用していることが認められている。つまり、「学習」にPCを利用する学生は国公立に多く、私立の「学習」にPCを利用している学生は「学校内」で利用している率が高い傾向が出ている。本学は私立であるが、「学校内」での使用は高くはない。

表15：学習希望の項目

- | |
|---|
| (1) 大学や社会に必要なPCの基本操作を学びたい (ワープロ、表計算、プレゼンテーションなど) |
| (2) 専門教育に必要なスキル・知識を学びたい (プログラミング、データベース、統計処理など) |
| (3) 創作活動に必要なスキル・知識を学びたい (画像処理・コンピュータグラフィックス、動画編集、DTMなど) |
| (4) インターネット、PCで被害者にも加害者にもならない知識を学びたい (情報モラル、情報セキュリティなど) |
| (5) その他 |
| (6) 学びたいものはない |

4. 学生の現状と高校の情報教育

表14の8項目において、自分ひとりで自信を持って行えるかどうかを問うたものについて、グ

ラフで表示したものが図1および2である。この8項目は主に高等学校で学ぶ内容から、特に大学で学ぶために必要な能力や知識を選び、どの程度できるかを「全くできない」から「自信を持ってできる」の4段階の中から最も近いものを回答させたものであった。現状のスキルに関する意識を問うことによって、大学入学までの教育内容の習得度合いが推測できる。

図2は表13・14についての全国のデータをグラフにしたものである。グラフの右側が「自信を持ってできる」項目であり、全体的に非常に少ない。予想以上に学生の自信のなさが表れている。「メールにファイルを添付」することは、携帯電話で経験があると思われる。「個人情報」と「著作権」は知識の項目である。

グラフの左側が「全くできない」項目であり、(7)のPCへのウイルス対策は、本学で71.2% (表13、図1)、全国で43.5% (図2) が「全くできない」と回答した。

「表計算」、「プレゼン」、「ワープロ」という順で「全くできない」と「少しできる」を合わせて75%を超えている。これらは操作スキルが中心の項目である。「少しできる」程度で、大学生活や社会に出て十分かどうかは判断しがたい。しかし高校までの経験では、自信を持って操作できる意識が低いといえる。この点は、実際に操作を測定している結果ではないので、学生の意識である。その意識の低い原因は、高校の情報教育が2単位では不足なのか、1年次で学習したものが大学入学の時点では減衰しているのか、あるいは自己効力感の低さであろうか。

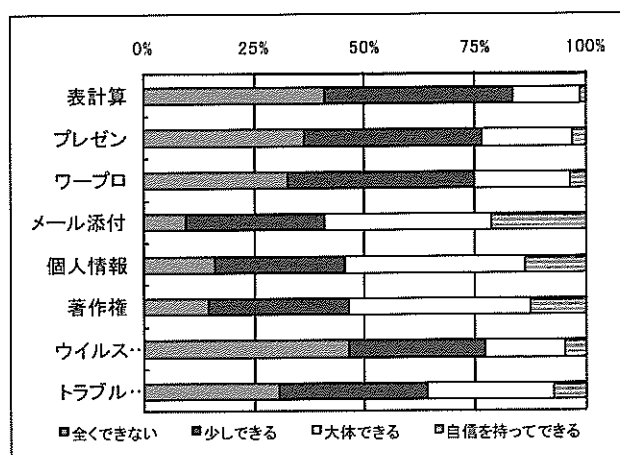


図2：全国の「できる・できない」

全国傾向として、大学や社会に出るための基礎が、高校の情報教育ですでに十分習得できているといえるのだろうか。

IV. 情報教育の今後に向けての提案

1. 情報教育の目的

高等学校の情報教育は単にPCスキルを高めることが目的ではない(永井2010)。情報社会に生きる人間として必要な知識やスキルを高めるものである。むしろ、情報社会に意欲的にかかわる姿勢の育成が重要である。この知識やスキルは汎用的なものであり、まさしく「情報リテラシー」である。さらにこれは情報社会に生きる社会人としてはだれもが必要とされる能力であり(文部科学省2008)、高等学校卒業までに、基礎を学んでいけば、大学や社会で応用したり積み上げたりできるものである。しかし、今日の大学では全入に近い状態でいわゆるユニバーサル段階を迎えており、入学してくる学生の多様化が激しく、対策も単純とはいえない。

2. 本学での実践

2010年度前期の食物栄養学科1年次情報機器演習のプレゼンテーションの授業を例にあげる。

プレゼンテーションでは調査として情報収集し、自分で理解した上で、それを伝えることについて聴衆となる対象集団を意識した活動を行う(鈴木2008)。どのようにして聞く耳を持たせ、相手に必要な情報を提示し共感や納得をさせることができるかを考えながら、スライドを作成し、シナリオを決め、そして実際のプレゼンテーション中も、相手の反応を見ながら話す。この時に、言語的な活動と同時に視覚的な要素も必要であり、その視覚的な要素には、見せるスライドもそうであるが、自分自身の姿や態度、表情や目の輝きまでもが含まれる。

そこで、プレゼンテーションのテーマとして「ファーストインプレッション」や「ノンバーバルコミュニケーション」などを取り上げた。これらに関する理論や情報収集で得られるデータなどは、プレゼンテーションに必要な知識であり、また、日ごろの良好なコミュニケーションにも役立つ。さらに、入学直後であっても、短大生にとっ

ては間近な就職の面接にも直接かかわってくることで学ぶことができる。この授業では、情報収集で知識を得、人のプレゼンテーションを見てよい点と悪い点を比較して学び、さらにいつも聞き手である自分が、発表者になるという経験を持ち、多面的な視点も持てる。そしてこの緊張を伴う経験は学生にとっては大きなプレッシャーでストレスとなるが、終了後は大きな達成感がある。授業後、どのようなプレゼンテーションが良いプレゼンテーションだと考えるかをレポートに課すと、その達成感や次への意欲を表す学生が多い。

具体的には、「初め、発表は嫌だと思ったが、多くの気づきがあり、やってよかった」「今回の経験から次はもっと良いものを作り良いプレゼンをしたいし、できると思う」「伝えることで一番大切なことは伝えようとする熱意である」「話したことに反応があると聞いてくれていることがわかるので、話しやすくなった」「第一印象や見た目が重要であるという意味が、調べてそして人の態度を見てよく分かった」などの学びがあった。

しかし、その一方で数人は人前に立つことを嫌い、自分のプレゼンテーションの日に欠席する学生も存在する。プレッシャーがダメージとなってしまう可能性も配慮しながら進める必要があるが、心身とも健全であれば、この緊張を乗り越えることでのみ得られるものがあることを経験してほしい。なぜなら、習得したPC操作のスキルは、効率をあげるためだけのものではなく、コミュニケーションや自分自身を向上させることにつながるためである。

3. 情報教育のテーマ

本学はPCを所有せず利用しないが、ノートPCの所有を希望している。PC所有率が低いことと関連して、インターネットを含めて携帯電話をよく利用している。利用するインターネットのサービス内容はコミュニケーションと娯楽である。PCの所有は学習関連項目の利用と関係があるが、大学ではPCの基礎を学びたいと希望している。自信を持って一人でできる項目が少ないので、本学においても、情報の基礎的な教育は枠組みを検討して継続が必要であろう。操作教育ではなく、学部学科ごとに必要となる分野や方向性を

精査しテーマを設定すると同時に、教員は学生の自己効力感を高める工夫をし、学生の意欲と学力向上をサポートしてはならない。

一方、情報教育にはテーマが必要である。それは、PC操作が教育の目的ではなく、視野を広げてテーマを追求することを効率的に行うために、PCという道具をどのように使うかを教えるためである。田中（2006）は情報リテラシーの入門科目について情報一般科目や情報基礎教育として「情報」という枠で扱うことが、科目の性質を見誤っていると指摘している。つまり、「情報リテラシー」は情報機器を扱うので情報枠であるが、リテラシーであるからアカデミックリテラシーに組み込むのが妥当ということである。さらに、どのような枠組みであろうとも、操作教育の感をぬぐうためには、ある程度高度なテーマを取り上げ、様々なツールを用いて表現するという方法で高等教育にふさわしい「情報活用」教育が可能になると述べている。

そこで、筆者はそのテーマとしてキャリア教育の内容を提案する。なぜなら、情報社会に積極的に取り組む姿勢を育成する情報教育は、社会や未知の組織や集団とどう関わって自分の進路や人生を歩んでゆくかを考えさせる、キャリア教育の中に含まれると考えるためである。

学生がキャリア教育にも通じるテーマを学ぶことは、すなわち、プレゼンテーションでの自身の

あるべき姿勢を気づかせてくれる、学びそのものである（辰島 2010）。学生がプレゼンテーションの実習を通して、情報の伝達やコミュニケーションを学んだことから、キャリア教育と情報教育は同時に展開できる可能性があると考ええる。

情報教育で身につけるべきことは汎用的なスキルであり応用力でもある。情報系の分野は基礎教育の部分でもソフトのバージョンアップをはじめ、技術革新や衰退も激しいことから、常に新しい情報に書き換えていく努力の継続が必要であり、そのために指導にあたる者は社会の状況に鈍感ではいけない。

<注>

- 1 CIEC 小中高部会「学生の ICT 活用実態調査」
http://www.ciec.or.jp/~ps_ed/wiki/ (2010.10.10 アクセス)
- 2 CIEC コンピュータ利用教育学会

<参考文献>

- 1) 鈴木栄幸、加藤浩、「プレゼンテーションの対話的構成過程に関する事例研究」、メディア教育研究第4巻第2号 pp.53 (2008)
- 2) 辰島裕美：「社会人基礎力を育成するプレゼンテーション授業の実践」CIEC 研究論文誌 vol.1 pp69-74 (2010)
- 3) 田中規久雄：「大学一般教育としての情報教育の機能と学生ニーズ」第3回 JADIE フォーラム (2006)
- 4) 永井克昇：「新学習指導要領と教科『情報』」全国高等学校情報教育研究大会 発表資料 pp.3 (2010)
- 5) 文部科学省：中央教育審議会答申 (2008)